第１章

洞窟教会および壁画の調査記録と考察
ーサンティ・アンドレア・エ・プロコピオ教会ー

宮下孝晴 [*1*2]・宮下睦代 [*2]

Investigation and Consideration of Cave Churches and Mural Paintings
Chiesa dei SS. Andrea e Procopio

Takaharu Miyashita[*1*2]and Mutsuyo Miyashita[*2]

The field research of Chiesa dei SS. Andrea e Procopio located in Comune di Monopoli, Provincia di Bari, Regione di Puglia was held in September, 2013. We summarizes the current conditions of architecture and murals, and organizes the future research points.

Key Words: cave church, mural paingins
キーワード: 洞窟教会，壁画

１．地理的位置とロケーション

N 40° 53'46.385" / E 17° 20'23.143"

バーリの南約 40km にあるモノーポリ郊外（Contrade di Monopoli）のアッスンタ小峡谷（Lama dell'Assunta）に沿って，左右の凝灰岩段丘を掘った洞窟住居群がある．現在，それらはオリーブなどを栽培する農園の中にあり，ほとんどは納屋として転用されている．全長数キロに及ぶアッスンタ峡谷全体では，中世にさかのぼる（堂内に壁画のある）教会や礼拝堂，修道士たちの住居も少なからず存在したであろうと推測されるが，現在ではニコロ・パスカーレ氏所有の農園内に唯一サンティ・アンドレア・エ・プロコピオ教会が辛うじて当時の面影をとどめるのみである．

現所有者のパスカーレ氏の赤い納屋の壁には，1999 年 8 月 14 日にはめ込まれた記念パネルがあり，次のような文章が記されている（Fig.1）．

この農園のある土地はゴート人，サラセン人，スラブ人らの蛮族の侵入してきた暗い時代からずっと，サンティ・アンドレア・エ・プロコピオ教会の名前で呼ばれてきた．
周辺の人々は信仰の拠点として，この教会を隠し，守ってきたからこそ，今でもなおビザンティンの息吹を色濃く感じることができるのである．かつて人々は，この洞窟住居群において信仰と労働の共同体を取り戻したのであった．
1929 年，カタルド・ロザーティ・ジュゼッペ（1872~1961）は自費を投じてこの地を購入し，その価値を高めんとした．
フランチェスカ・ロザーティ
彼の娘にして，信仰と勤勉とこの肥沃な土地の最後の相続人
古代人は未来のために石に刻むことを望んだ．
1999 年 8 月 14 日

Fig.1 現所有者の赤い納屋の壁にはめ込まれた記念パネル

かつての川幅 15 メートルくらいの河岸段丘の崖に北北西向きにファサードが作られている．（したがって 2 つの後陣は南南東を向いている．）ファサード前には左右に幹周りが 5.5m と 6.5m のオリーブの巨木が 2 本あり，樹齢は 800 年くらいと思われる．ただ，1990 年代の写真をみると，教会前はかなり鬱蒼としたオリーブ畑であったことがわかる．そして，すぐ対岸の段丘の崖にも，現在は納屋として使われているがおそらくは修道士たちの住居であったと推測される洞窟が存在している．

*1 人間社会研究域　歴史言語文化学系
*2 金沢大学フレスコ壁画研究センター
*1 Institute of Human and Social Sciences, Faculty of Letters
*2 Research Center of Italian Mural Paintings

2．建築について

創建は 11 世紀にさかのぼり，中央入口上に刻まれた「ラテン語の奉献文」から，聖アンデレ[1]と聖プロコピウス[2]に捧げられた教会であることがわかる．また，その下の半円アーチ内には，「ギリシア十字」(22cm)が線刻されている（Fig.2）．この奉献文は教会建設に関わる稀有な文字資料であり，さらに研究を継続する必要がある．バーリの総大司教ピエトロ（Petri）の名前から建設年代が 1073 年頃とわかり，建設自体は助祭でもあったマエストロ・ジョヴァンニ（Iohannis）が担当し，富裕な平信徒たち（Iohannes, Alfanus Abbas, Petrus, Paulus）からの寄進によって実現したと記されている．なお，この碑文と連動すると思われる別の碑文が第 1 内陣障壁左側のアーチ壁に刻まれている（Fig.3）が，正確な判読はかなり困難で，今後の研究に期待したい．

アッスンタ小峡谷（Lama dell'Assunta）の段丘岩盤を南南東に向けて掘削した単廊式教会（奥行き 9.75m×幅 5.85m）の平面プラン（Fig.4）は，創建当時から大きく変更されているとは思えない．ただ，集中豪雨などの際には峡谷は水路に戻り，上流から大量の土砂が押し流されてきて地表高を上げている．中央入口の横幅は 110cm，現状では高さが 150cm 堆積している土砂を排除すれば 2m くらいと推定）で，すぐ上にギリシア十字のシンボルと前述のラテン語碑文，その上に明かり取りの窓が設けられている．

左入口の幅は 55cm，右が幅 70cm．土砂は教会堂内にも流入して乾燥，しだいに床面が上がり，結果として現在の天井高は相当に低くなってしまった．堂内に流入した土砂を排除し，かつての床面まで掘り下げられれば，建築構造に対する新たな発見や解釈が期待できると考える．なお，土砂の流入は近年でも頻繁に繰り返されており，2013 年 1 月の予備調査の際にも確認することができた．ちょうど集中豪雨の直後であり，かつての峡谷の底にあたる教会前はひどくぬかるんでおり，調査を終えてバスに乗車する時には全員が泥だらけの靴を脱いだものであった．また，1990 年代に撮影された写真[3]を見ると，現在以上に地表が上がっており，パスカーレ氏の納屋の方から教会に下りてくる（ファサードに向かって左側に設けられた）石段はなく，泥の坂道になっている．

←**Fig.2** 中央入口上に刻まれた「ラテン語の奉献文」

+Hoc templum fabricare fecer (unt) Ioh(annes), Alfanus Abbas, Petrus,
Paulus, in onore s(an)c(t)i Andree ap(osto)li et s(an)c(t)i P(ro)copii martiris p(er)ma
nus lohannis diaconis atque magistri, et dedica
tum est p(er)manus domini Petri ar(chi) e (pisco)pi, secundo die in
trante mense November. Hoc scripta fieri fecit Laq(ui)tnus p(res)b(yte)r, filius suprascipti magistri p(er)
manus Radelberti p(resbyte)ri+

［*Marialuisa Semeraro Herrmann, Raffaele Semero, "Art of Rupestrian Civilization in Fasano during the Middle Ages", Schena Ed., Fasano (Brindisi), 2005, p.281*］

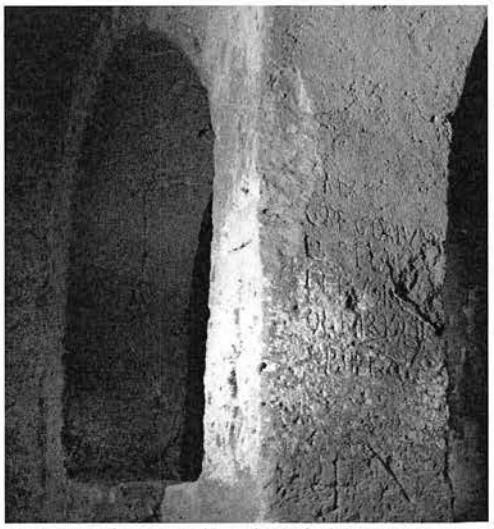


Fig3 碑文が刻まれた第 1 内陣障壁左側のアーチ壁

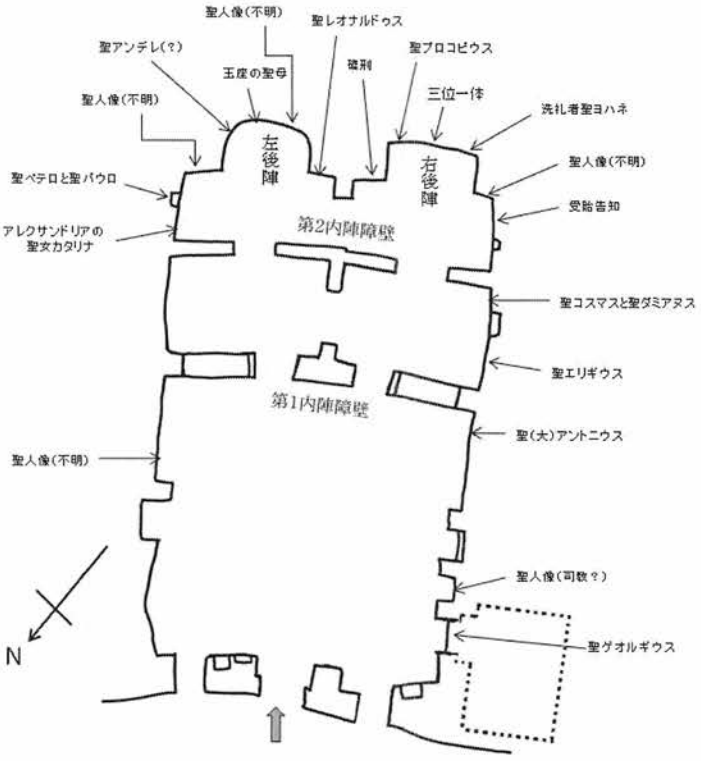


Fig.4 3D スキャニングデータから作成した教会の平面図

洞窟教会としては比較的よく均衡のとれた左右対称型の平面プランである．岩盤を掘削して空間を形成していくために，（地上に建設する教会と違って）洞窟教会は幾何学的に整然とした空間を構成することが難しいばかりか，いつでも必要に応じて，堂内の空間を自由に拡張することが容易なため，創建当初の構造がそのままの形で保存されることが少ないからである．

ファサードをくぐった最初のほぼ正方形の広い空間は，天井面が曲線を描いて入口から部屋の中程まで垂れ下がり，そこから第1内陣障壁に向かっては水平面となっていて，やわらかな奥行きを感じさせる空間となっている．

平面プランで特徴的なのは，後陣の手前に設けられた二重の内陣障壁であろう．ファサードをくぐると，2つの入口，2つの窓をもつ4連続半円アーチからなるアーケード（門）のような第1の内陣障壁で最初の仕切りがあり，その奥に柵のような第2の内陣障壁を設けて後陣のある聖域を隔離している．「門」のような第1の内陣障壁はテンプロンと呼ばれているが，「柵」のような後者にあえて呼称を与えるとすれば，イコノスタシスであろうか．この2段構えの構造は，創建当初の社会構造（ヒエラルヒー）を強く反映しているかもしれない．推測の域は出ないのだが，3区画は手前から平信徒，支配者（封建諸侯・騎士などの特権階級），聖職者の区分に該当するように思える．これら二重の内陣障壁に開けられた2つの通路の先に，祭壇のある2つの刳型後陣が設けられている．

ただ，これほど均整の取れた平面プランの教会でありながら，現状を見るかぎり，正面ファサードについては左右対称とは言い難い不均衡さが目立つ．何らかの理由があってのことか，あるいは後世に改変が加えられたとしても，釈然としないものがのこる．以下に現状ファサードの不均衡な構成を列挙する．

①ファサードの中央入口は，教会の中心軸よりも大きく左にずれている．

②中央入口の上に開けられた半月型の窓も入口の中心軸より左にずれている．この窓は（少なくとも）下方に拡大された可能性がある．上述のラテン語で刻まれた奉献文の第1行目の上端に，あるべきはずの「ゆとり幅」がない．

③左右の細身の入口は，おそらく中央入口と高さがそろえられていた．そして，その上にはそれぞれ中央入口と同じく半月型の窓が穿たれていたと思われるが，その水平の仕切りが崩れて（あるいは破壊されて）一続きの縦長の入口となったと考えられる．

④右側の入口の右壁面を1段低く削りこんで，上方にラテン十字，下方にラテン語で"BENEDIctus"（小文字は推測）と判読できそうな刻文が見える．

⑤右側の入口壁は，ファサード面に対して直角にではなく，斜めに削りこんであり，そのためにここから後陣部をよく見通すことができる．農作業で教会前を往来するたびに，農民たちは，この右側の細い扉から後陣に向かって跪拝できるような工夫だったとすれば，④によって右側入口前をタベルナクルムのような礼拝の場として整備したという推測も可能であろう．

なお，右手入口を入ってすぐ右に長方形の部屋がある．「聖ゲオルギウス」の壁画の下に半円アーチの小さな入口があり，墓室であった可能性は高いが，まだ発掘調査の報告による確認はない．部屋には窓がなく，小さな出入り口1つで日常的な出入りは不便であることからも，墓室であったと考えて間違いないであろう．もちろん，納屋としても倉庫としても使い勝手が悪く，後世に農夫が掘ったとも考えられない．

3．壁画について

堂内をいくつかの区画に分けて，描かれた壁画を考察する．

(1)ファサードの内側（裏側）

現状では壁画の描かれた痕跡はどこにもない．左右の入口を入ったファサード裏に設けられた半円アーチの小壁龕（ニッチ）内に聖人像が描かれていた可能性もあるが，その痕跡はまったくない．

(2)堂内右側壁

ファサードをくぐった右側壁は平坦な壁面ではなく，4本の付柱（角柱）の柱間を小壁龕として利用していたようであるが，左2つの小壁龕には水平に2段の棚板を渡した痕跡も確認できる．最初の壁龕の上半分には「聖ゲオルギウス」（カッパドキア生まれの3世紀の戦士聖人）像がかすかに残る．聖人の顔の横に，聖人名を記した白抜きラベルがあり，現在でも辛うじて判読可能である．その下半分の開口部が墓室への入口になっており，白地に赤い十字のついた盾と長槍で龍を退治する馬上の聖ゲオルギウスは，墓室に眠る霊を守護するために描かれたと考えられる．少なくとも，奥の墓室が掘り抜かれた後で「聖ゲオルギウス」は描かれている．なぜなら，墓室入口の半円アーチは「聖ゲオルギウス」像を破壊することなく，（右側の付柱を含めた）アーチ周辺部の壁画装飾（赤と黒の波線でジグザグ三角形を連続させた模様）も「聖ゲオルギウス」の描写と同時に描かれているからである．なお，教会堂内の腰板にあたる（床から約1m）壁面全体には，（部分的にしか残存していないが）マダラリスの毛皮をパッチワークした壁掛け模様が描かれていたようである．

第2の壁龕には天上からの亀裂が縦に走り，亀裂に沿って水が流れるためか，白く塩が吹き出し，緑色の苔も目立つ．壁画の判読は相当に厳しいが，よく見ると，描かれた聖人の頭部が見える．王冠を被っているようにも，詰め襟のような司教服を着ているようにも見えるが，聖人を特定することは不可能である．なお，第3の壁龕には壁画の痕跡を確認することはできない．

4本目の付柱から奥，第1内陣障壁までの右側壁には赤（外側）と白（内側）の2色枠の中に3人の聖人が描かれていた．現存するのは左側の聖人の断片（下半身）のみで，あとの2人は足の甲のみのかすかな痕跡が確認できるだけである．左側の聖人は右手に杖，左手に赤い表紙の聖書と（悪霊を払う）鈴を持っていることから，隠修士の「聖（大）アントニウス」であると判断できる．なお，この鈴のあたりまで，水が流入したことがあったようで，その時の水位を示す横一線の痕跡がはっきりと残っている．また，湿気は今も下から上がってきているようで，壁面の下半分には緑色の苔が目立つ．

(3)堂内左側壁

付柱から奥，第1内陣障壁までの反対側の壁面にも，右側

壁と同様に，赤（外側）と白（内側）の2色枠の中に3〜4人の聖人が描かれていたと思われる．現状では右下方に枠線の痕跡，左上方に（オーカー色の大きな円光に包まれた）髯のない若い聖人の頭部とその下方にかすかに衣服の痕跡が残っている．この聖人のサイズから推測すると，（もし単純に聖人立像が横に配置されていたとすると）3人ではなく4人描かれていた可能性もある．

(4)第1内陣障壁と第2内陣障壁に囲まれた空間（間隔は180cm）

①右側壁

右後陣の祭壇ブロックが崩れて手前に転がってきたために第2内陣障壁の右側が大きく破損している．右側壁には薬箱を持つ2人の聖人，伝染病の守護聖人（双子の兄弟）として人気のあった「聖ダミアヌス」（緑色の服に赤いガウン）と「聖コスマス」（コスマスの衣装は色彩反転で赤い衣服に緑色のガウン）が赤と白のラインで囲まれた枠の中に描かれている．背景に白抜きラベルで聖人名が描かれているのは，「聖ゲオルギウス」の場合と同じであるが，文字はほとんど欠損している．向かって左の聖人が“S.DA・・・”と読めるので「聖ダミアヌス」，右が「聖コスマス」であろう．一般に医者は毛皮で裏打ちしたガウンを着用していた．この2聖人の彩色が剥落している部分を見ると，イエローオーカーで基本的輪郭デッサンが取られたことが明らかである．（とくに明らかなのは，「聖ダミアヌス」の腰のあたり．）また，「聖コスマス」の足下に半月型の（粗い鑿跡のある）小壁龕（幅50cm，縦29cm，奥行き18cm）が掘られている．

そのすぐ右枠の中に「聖エリギウス」(588頃〜660)が描かれている．641年頃にノワイヨンの司教に叙任されたため，ここでも司教冠を被っている．右手は小指を曲げたラテン式祝福の印，左手には黄色い表紙の聖書を持っている．背景に白抜きラベルの聖人名も辛うじて読めるが，左下に描かれたさまざまなモティーフは彼が聖エリギウスであることを如実に示している．彼はフランスのリモージュ近郊で金銀細工や鍛冶を生業としていたことから，金槌や火ばさみ，鉄床や蹄鉄，釘などが図像学的持物となっているからである．なかでも，画中の「蹄鉄と馬」は，次のようなエピソードに由来する．悪魔に取り憑かれて人を蹴るようになった馬に蹄鉄を付けることになった彼は，まず馬の脚を切断して蹄鉄をつけ，それから馬の脚を元に戻したというのである．「聖エリギウス」の枠の右側には，「聖ゲオルギウス」の右側で見たのと同じ，赤と黒の波線でジグザグ三角形を連続させた模様が描かれている．そして，これも「聖ゲオルギウス」周辺と同じに，3聖人を囲んだ枠線の下には，王侯貴族がマントなどの裏打ちに用いたマダラリスの毛皮をパッチワークした壁掛け模様が描かれている．

なお，「聖ダミアヌス」のあたりは3層構造が観察できる．岩壁に直接描いたと思われる赤い線，その上に化粧漆喰（アッリッチョ）を塗り，さらに石灰画法で描かれたと思われる描写層の3層構造であると現地では判断したが，石灰画法という技法も含めて，重層構造については慎重に検討すべき問題である．

②左側壁

壁画の痕跡なし

(5)後陣周辺

①右後陣周辺

右の後陣に向かって右側の壁は，前述の「聖コスマスと聖ダミアヌス」の枠の左側に位置するところで，「受胎告知」が描かれている．両者の仕切り部分，つまり第2内陣障壁の上には赤線と黒線によるナイーブな唐草模様の仕切り枠がある．前述の「赤と黒の波線でジグザグ三角形を連続させた模様」も同様だが，南イタリアの洞窟教会壁画では「唐草模様タイプの装飾」はモットラのサン・ニコラ教会の例はあるが，それほど多くはない．この2つのタイプの装飾が同一空間に描かれた例で筆者の記憶に残っているのは，カッパドキアのカランリク（ダーク）教会の壁画装飾（12-13世紀）である（Fig.5）．

Fig.5 カランリク（ダーク）教会の壁画装飾（カッパドキア）

ところで，これら一連の描写にはいかなる不連続も見い出せないため，同時期に描かれたものと判断できる．

「受胎告知」に注目しよう．画面を2等分して，向かって左側にマリア，右側に大天使ガブリエルが描かれている．マリアの背後には椅子と緑色の大きなクッションはあるが，マリアは立ち上がり，驚いたように右胸のところで手を合わせている．マリアの椅子はシンプルなものであるが，奥行きに向かって先つぼまりになっていて，（聖人の単独像を描く場合と違って）この画面では奥行きのある空間でのドラマを描こうとするはっきりした画家の意図が読みとれる．

大天使ガブリエルの祝福の手は，右手のひとさし指と中指の2本を立てて会釈する伝統的表現である．赤いマントの内側はオーカー色のトーガに似た衣装で，片膝を前に出して跪こうとしているかに思える．また，左手には巻物をもって差し出している．記された文字は判読不可能だが，おそらくは『ルカ福音書』の一節 “Ave gratia plena Dominus tecum”（恵まれた女よ，おめでとう．主があなたとともにおられます．）が書かれていたと推測される．大天使ガブリエルの背中には大きな翼があり，その翼は明るいシノピア色で素描した上に彩色している．翼の下半分くらいに黒っぽい色が残っているが，実際にどのような彩色であったかはわからない．また，ガブリエルが左手に持つ巻物の下には，小壁龕が穿たれている．

画面の両脇に細い円柱，マリアとガブリエルの間にも細い円柱（柱頭飾りつき）が描かれており，受胎告知の画面の空間は1つの建築空間として設定されていたと考えられる．マリ

アが立つ画面の左半分はキボリウムを思わせる小部屋で，そこから張り出したテラスに大天使ガブリエルが舞い降りてきたという設定ではなかったか．ガブリエルの背景に石積の壁が見えているので，そこが屋外ないしは半屋外であると考えられるのである．

残念ながら「受胎告知」の描かれた壁面は剥落がひどいだけでなく，全体がかなり白っちゃけていて判読は難しいが，南イタリア各地の作例も決して少なくはないので，図像学的系譜の観点で分類してみる必要があるだろう．また，前述の 3 聖人と「受胎告知」は一連の同じ壁面に描かれており，壁面の重層（3 層）構造で枠形式も同じであることから同時期の制作だと思われるが，描写の点からみれば同一の画家の手に帰すことはできない．

さて，次に右後陣に目を移そう．後陣にあった祭壇は高さが 50cm くらいの低いものであったが，破壊されて前方に 2 回転したと思われる．祭壇（石のブロック）は後陣壁に密着していたのではなく，祭壇との間隔は約 40cm であった．後陣には縦長の構図の「三位一体」が描かれているが，その十字架を伸びやかに描くために祭壇の高さを低く抑えたのかもしれない．かつての祭壇であった石の直方体ブロックは，現在上になった部分が地面に接していたことがその形状から確認できるが，そうであれば，祭壇ブロックは信者に向いていた方の面が漆喰で塗られていたことになる．また，直方体ブロックの祭壇だけでは小さかったようで，（右後陣に描かれた「洗礼者聖ヨハネ」の左足先が破壊されていることから，壁画が描かれた後のことと推定されるが）後陣全体に差し渡す棚板（石板？）を補助的に支えたと思われる窪みが後陣の左右にある．

右後陣の中央には「三位一体」が描かれており，キリストの十字架の横木を天上から見下ろす巨大な「父なる神」が支えている．一般図像学では聖霊を象徴する「白い鳩」が画中に描かれているが，剥落のはげしい現状では見つけることはできなかった．中央上の「父なる神」は強烈なインパクトのある描写で，特徴的な円形モティーフ織りのマントを羽織っている．顔は赤色で輪郭を取り，直線的な白い線で勢いよく髯を描いている．左右不均衡に描かれた目はひときわ印象的で，その視線からは信者に向けられた厳しさと慈愛が感じられる．「父なる神」のマントで包まれるような形で，「子なるキリスト」である磔刑が中央に描かれているが，あくまでも荘厳な神の姿に対して，キリストは人間的で弱々しい肉体として描かれている．また，キリストの円光の上の茶褐色部分は，（文字の痕跡はないが）十字架上に掲げられた「捨て札」（罪状書き）であったと思われる．「父なる神」の円光にはコンパスの痕跡があり，半径 22.5 センチの正円だが，後陣の上端を超えてしまっているので円光の一部が欠損したように見える．キリストの眉間の中央にも円光を描く際のコンパスの中心痕がみられる．

「三位一体」を挟んで刳型の後陣の左右に，代願者のように 2 人の聖人像が描かれている．向かって右側は半裸の「洗礼者聖ヨハネ」である．左側の聖人像は，（洗礼者聖ヨハネの弟子であったとされる）使徒の「聖アンデレ」という説と，「聖プロコピウス」であるという 2 説がある．「洗礼者聖ヨハネ」は，その特徴的な（ラクダの皮衣をまとった）姿から問題はないだろう．左手の人差し指を 1 本立てて天を示す形は，ルーヴル美術館所蔵のレオナルド・ダ・ヴィンチ作「洗礼者ヨハネ」(1513-16)が右手人差し指を天に向けている印象的な作品を彷彿とさせる．おそらく左手からは巻物が下がっており，そこには『ヨハネ福音書』の一節 “Ecce Agnus Dei”（見よ，神の子羊）が書かれていたであろう．後陣内の向かって左側の聖人については，この教会が聖アンデレと聖プロコピウスに捧げられていることは確かであるから，そのどちらかに該当させたいところである．聖アンデレは洗礼者聖ヨハネの弟子であったことを考えれば，左右がうまく対応するようだが，この聖人が司祭の服を着ていることからすれば，やはり聖プロコピウスとすべきであろう．（彼の左肩のあたりにも聖人名を記した白抜きラベルが見られるが，文字は完全に剥落している．）

「三位一体」の描かれている後陣の右外側の壁には，赤と白で枠をとった縦長の絵がある．両手で本を持った司教服の聖人だが，誰であるか特定することは不可能．顔と手，衣服の一部に緑色が見られる．ほぼ顔全面に緑色が残っているので，緑色顔料の特定とともに，下地としてのヴェルダッチョの可能性も考慮に入れて研究する必要がある．（右側壁に描かれている「聖コスマスと聖ダミアヌス」，「聖エリギウス」の顔と手，「受胎告知」のクッションにも緑の彩色が多く見られる．）

「三位一体」が描かれている後陣の左外側の壁には「磔刑図」があるが，その位置は後陣内に描かれた「三位一体」の十字架のすぐ左横にあたる．やや Y 字型のフォルムやキリストのうつむきの角度などは全体的に相似しているが，唯一異なる点は両足の処理である．後陣内の「三位一体」の磔刑では，キリストの両足は右足を上にして重なっているが，左の「磔刑」では（その下に小壁龕が掘られたため多少の欠損はあるが）明らかに両足は並行にそろえられている．「磔刑」の左右に描かれた人物については劣化が激しく，図像を正確に判読することは不可能である．一般的には聖母マリアと聖ヨハネが描かれるが，2 人ともヴェールを被った女性像であった可能性が高く，（向かって）左側が青いヴェールの聖母マリア，右側が赤いヴェールの聖マグダラのマリアと推測する．

右後陣から左後陣に移る仕切り壁のアーチにも，壁画の断片がのこっている．彩色は赤と白と黒．聖人像ではなく，装飾模様だけではなかったかと思われる．

②左後陣周辺

左後陣の中央に描かれているのは「玉座の聖母マリア」だが，玉座とマントはほんの僅かの痕跡のみで，少し首を左前方下に傾けたマリアの頭部と円光のみが残っている．その円光は，きれいな正円に見えるが，コンパスを利用した痕跡は見られない．

聖母マリアの左右には 2 人の聖人が代願者のように描かれていたことが，ごく一部だが現存している断片から確認できる．しかし，聖人の特定まではできない．向かって左の聖人は一説には「聖アンデレ」と言われるが，顔の左 4 分の 1 ほどしか残存していない．それでも「聖コスマスと聖ダミアヌス」や後述する左側壁に描かれている聖人と強い類似性を示し，金髪の中世フランス騎士を彷彿とさせる顔をしていたことがわかる．その円光表現にしても，金箔の代用としての濃いオーカ

一色，円周は黒い輪郭に白いドット模様で同じである．

ここにも右後陣と同様の祭壇があったことは，基礎の痕跡から確認することができるが，直方体の石のブロックそのものは周囲にない．また，右後陣と同様に棚板を差し渡して祭壇としたような痕跡（左右の切り込み）が見られる．

「玉座の聖母マリア」が描かれている後陣の右外側の壁に縦長枠があり，「聖レオナルドゥス」が描かれている．現状では壁面に白い塩が吹き出していて画像は見えにくくなっているが，前掲書に掲載されている写真[4]では聖人名を記した白ラベルに，その名がはっきり読み取れる．左手に大きな本を持ち，右手は人差し指と中指の 2 本を立てて（ラテン式の）祝福を与えている．聖レオナルドゥスは 6 世紀のフランク王クロヴィスに仕えた人物で，囚人を保護したとされる．また，後にリモージュ近郊のノブラックに修道院を創設したベネディクト会士と考えられている．したがって，この図像においてもベネディクト修道会の黒い頭巾を被った僧服を身にまとい，聖書を抱える左手の先には金属製の壊れた足枷を下げている．また，赤い表紙の聖書の表紙を飾るデザインは，フランス王家の百合の紋章のように見える．聖人の足下の壁には方形の小壁龕が穿たれている．

「玉座の聖母マリア」が描かれている後陣の左外側の壁に描かれた聖人は，円光上端の一部とハの字に開いた足先を残すのみで，ほぼ完全に剥落しており，聖人の特定は不可能である．ハの字に開いた素足は（後述する）左側壁の「聖ペテロと聖パウロ」にも見られるが，右足をやや前に踏み出して枠線から突出するような表現は「聖ペテロと聖パウロ」の単純な足の表現を凌ぐ新しさが感じられる．

半円刳型後陣の周囲を飾る装飾フリーズは，水差しから成長して伸びる蔓性植物（生命の樹）をモティーフにして，黄色の蔓，赤い花，緑の葉が S 字状に絡んでいる．ただし，このフリーズは後陣の左端から伸びて，右側に描かれた「聖レオナルドゥス」を囲んでいる縦枠のところで途切れる．

最後の壁面は，左後陣に向かって左側の壁，第 2 内陣障壁の奥であるが，「聖ペテロと聖パウロ」の 2 人が 1 つの枠内に描かれている．左側の聖人を聖ペテロとする図像学的判断材料となる「鍵」は欠損してしまっているが，右手に（画面の枠線を突き抜ける長い）剣を持ち，左手で開いた書物を持つ聖パウロと対をなす形で描かれていること，および顎髭を蓄えた特徴的な風貌（の輪郭）から，聖ペテロと判断して間違いないと思われる．なお，（書簡の著者を象徴する）開かれた縦長の本を下から支える聖パウロの左手の形が，親指が長すぎるため異様にみえる．

2 人の聖人の間におにぎり型の小壁龕があけられて，その周辺の剥落がとくに激しい．その左側の連続する別枠の中に描かれているのは，「アレクサンドリアの聖女カタリナ」と推測される．図像学的な判断材料としては，王冠をかぶった（王家出身の）聖女であること，左下方に見えるオーカー色のモティーフが殉教具の車輪のように見えるという 2 点である．聖女の円光わきに聖人名の記載に用いられた白抜きラベルがあるが，文字は完全に剥落している．なお，前述の「聖ペテロと聖パウロ」の円光にはコンパスは用いられていないが，この「アレクサンドリアの聖女カタリナ」の円光の円周部にはコンパスの刻線がくっきりと残っている．

(6)壁画の制作年代

堂内に描かれた壁画の制作年代を特定することは容易ではないが，教会創建時のビザンティン様式の影響と 1266 年からシチリア王国の王位について南イタリアを支配したフランスのアンジュー家がもたらした文化が融合しているように思える．したがって全体的な印象では 11 - 14 世紀にかけて描かれた壁画であると言えよう．

註

1. アンデレ　Andreas［ギ］ Andrew［英］ Andreas［独］ Andre［仏］ Andrea［伊］　新約聖書人名．「男らしい」の意．ベツサイダの人でペテロの兄弟．元来はガリラヤ湖畔カペナウムの漁夫．ヨハネ福音書によると彼はバプテスマのヨハネの弟子であったが，イエスの弟子となり，イエスと共にカペナウムに赴いた．また，アンデレは兄弟シモン（ペテロ）をイエスに会わせている．5000 人への給食時に群衆の食事のために配慮し，ピリポと共にギリシア人をイエスに紹介するなど，地味ではあるが注意のゆきとどいた性格の人物．のちにアンデレの伝道旅行，奇跡行為，殉教を扱った使徒伝説が生まれた．エウセビオスによると，彼はスクテヤに伝道したといわれる．（『キリスト教人名辞典』，日本基督教団出版局，東京，1986, pp.105-106）

2. プロコピウス　Procopius[ラ]　Prokópios［ギ］　？- 303.7.7　ローマ時代の殉教者．この人物については教会史家エウセビオスが報告している．彼はイェルサレムに生まれ，スキトポリスの教会の読師として，その謙遜・正直な人柄のゆえに尊敬を受けた．ディオクレティアーヌスの迫害の時，他の信者と共にカイサリアに連行され，取調べを受け，神々に犠牲を捧げるよう言われたが，ホメーロス（Homēros）の句を引用し「何人もの主人に仕えるのはよろしくない，一人の主，一人の王あるのみ」と答えたため，反逆者として直ちに首をはねられた．これはパレスティナ地方迫害の最初の年のことで，彼はその最初の殉教者であった．後代に至り，以上の報告に様々の話が付加されて，結局は 3 人のプロコピウス（司祭，軍人，ペルシア人）が出来上がり，聖人伝に記録された．祝日は 7 月 8 日．（『キリスト教人名辞典』，日本基督教団出版局，東京，1986, p.1360）

3. Marialuisa Semeraro Herrmann, Raffaele Semero, "Art of Rupestrian Civilization in Fasano during the Middle Ages" , Schena Ed., Fasano (Brindisi), 2005, p.282, Fig.187

4. Marialuisa Semeraro Herrmann, Raffaele Semero, op.cit. (n-3), p.304, Fig. 215

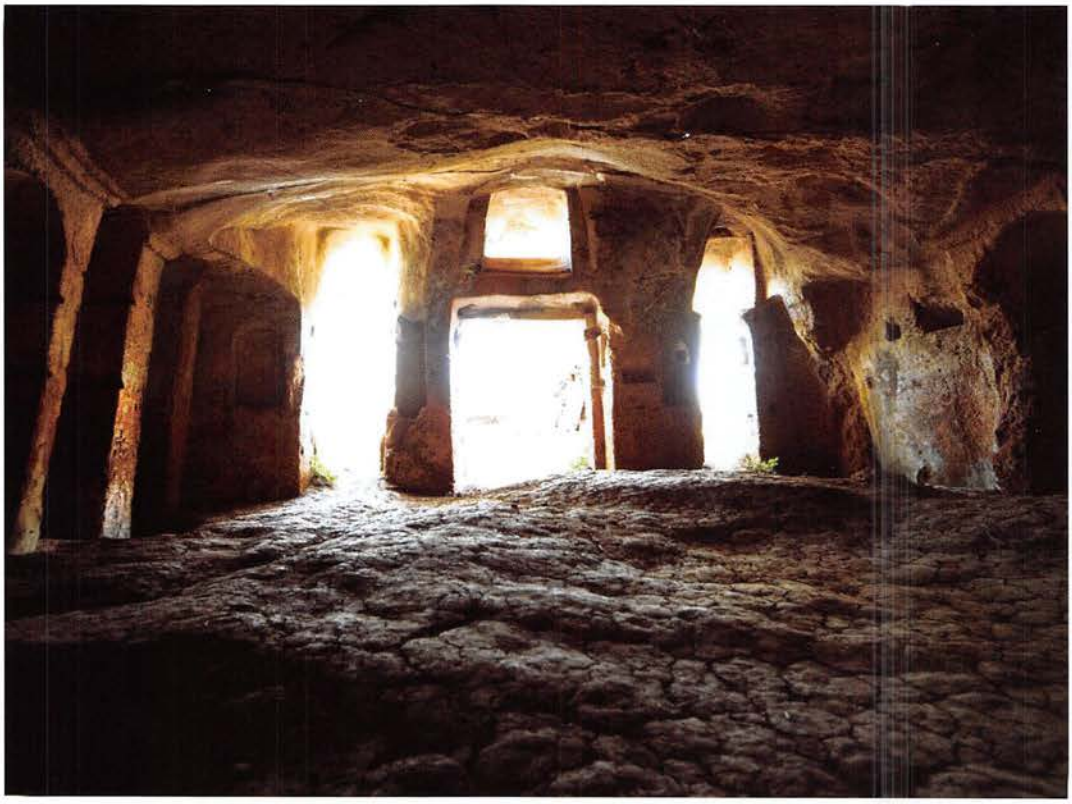
参考文献

・Marialuisa Semeraro Herrmann, Raffaele Semera, “Art of Rupestrian Civilization in Fasano during the Middle Ages”, Schena Ed., Fasano (Brindisi), 2005

・Franco dell’Aquila, Aldo Messina, “Le Chiese Rupestri di Puglia e Basilicata”, Mario Adda Ed., Bari, 1998

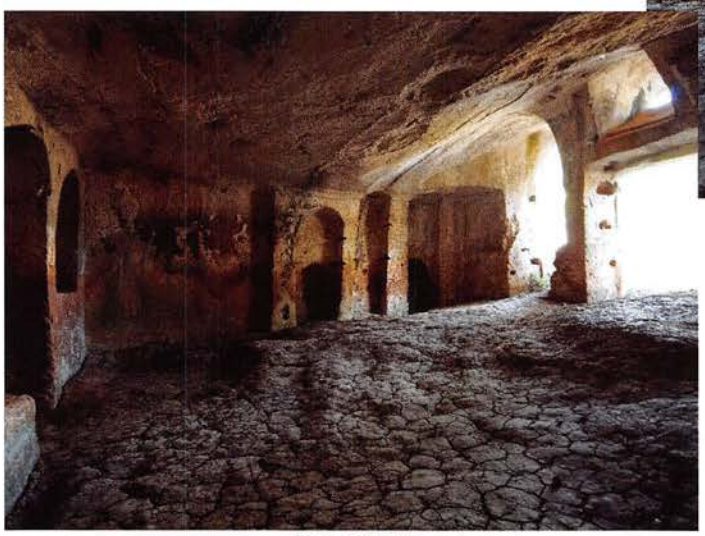
サンティ・アンドレア・エ・プロコピオ教会（モノーポリ）

中央入口上に聖アンデレと聖プロコピウスへの奉献文がラテン語で刻まれている



サンティ・アンドレア・エ・プロコピオ教会

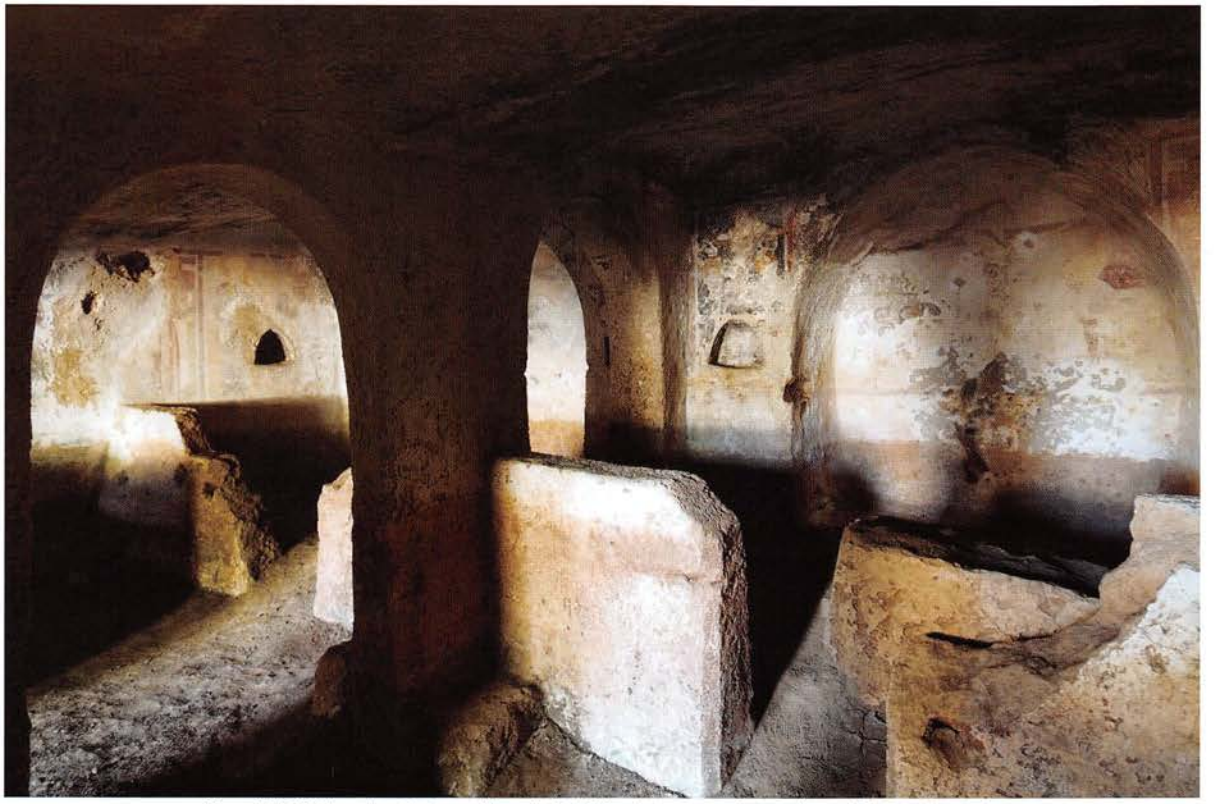
堂内左側壁



堂内右側壁

堂内には大量の土砂が入り込み、
床面が高くなっている

2つの入り口、2つの窓を持つ4連アーチの第1内陣障壁（テンプロン）が堂内を仕切っている



第1内陣障壁の奥はさらに第2内陣障壁（イコノスタシス）で仕切られている

左後陣には「玉座の聖母と2聖人」、
その左側の壁には「聖ペテロと聖パオロ」、「アレクサンドリアの聖女カタリナ」が描かれている

「聖ペテロと聖パオロ」

フリーズ部分の装飾

「玉座の聖母」（斜光線照射）

「玉座の聖母」（散乱光照射）

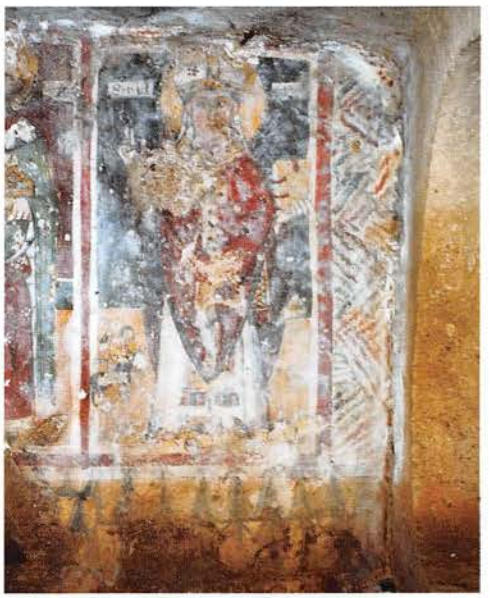
（左から）「聖人像（不明）」、後陣内には「玉座の聖母と２聖人」、「聖レオナルドゥス」

右後陣には「三位一体」、「洗礼者聖ヨハネ」、「聖プロコピウス」
その右側の壁には「受胎告知」、「聖コスマスと聖ダミアヌス」が描かれている

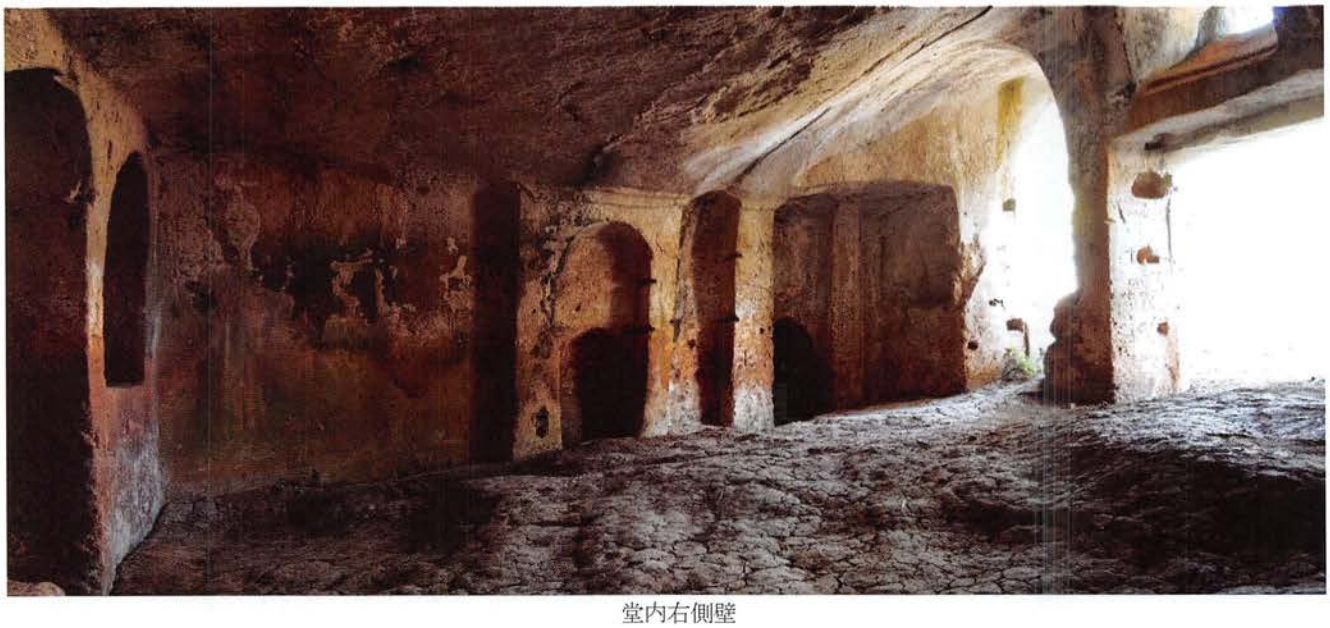
右後陣

(左から)「受胎告知」、「聖ダミアヌス」、「聖コスマス」、「聖エリギウス」

「受胎告知」



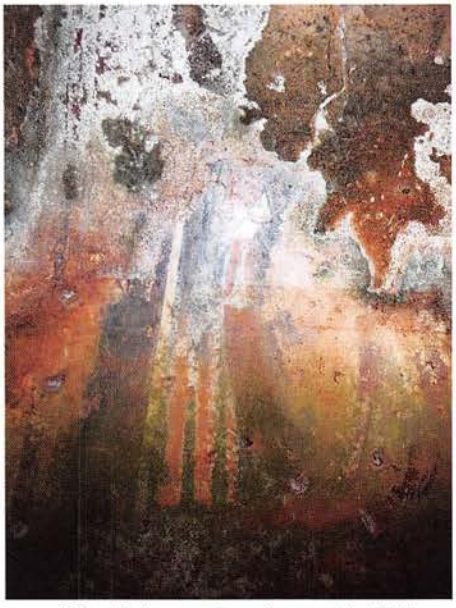
「聖エリギウス」



堂内右側壁

「聖人像（司教？）」（右側壁）

「聖ゲオルギウス」（右側壁）



「聖（大）アントニウス」（右側壁）

「聖人像（不明）」（左側壁）